

III 今後の山村の展望

(1) 山村問題の歴史的背景

これまで考察してきた白山麓山村の変貌は、全国の山村にも普遍的に見られるものである。つまり、主として経済的要因によって山村をとりまく情勢が激変し、山村自身が有してきた諸々のパワーやエネルギー（人口扶養力・資源供給力・各種生産技術など）が低下するか不要になるかして、その地位が長期低落傾向にあるという姿が日本各地の村々で見られるということである。より具体的にいうならば、製炭・焼畑・木地・狩猟・養蚕などの“山の文化”が、都市化・工業化・産業の高度化といった日本社会の変化を前にしてその存在理由を失ってしまい、山村自体の存続基盤も揺らいでいる状況にある。

巨視的に見れば、相対的な意味において現在は最も山村にとって厳しい時代の一つであるといえる。中世の頃までは、戦乱に明け暮れていた平地よりもむしろ山村の方が安定した生活が可能であった。1人（1戸）当りの自由開放空間が山村では大きかったので、焼畑・畑作と採集・狩猟を組み合わせた複合生産形態があるかぎり食糧自給の問題には弾力的に対応できたと推定される。特に落葉樹林帯では、衣・食・住に利用できる野生資源が多く、豊かな生活基盤ができていた。また交通の便も今日考えるほど悪くはなく、尾根道・峠道を利用しやすい山村の地形条件からすると、生産や交易などのために割合自由に山中を往来でき、遠隔地の情報も思いのほか集まってきた。こうした山村の“独立性”は近世の幕藩体制の成立以後次第に失われた。米作に基礎を置く平地の支配機構（幕府・大名）の中に組み込まれ、また商品経済の流入もあって、山村は政治的・経済的に自律性が低下した。しかし、山の資源の有用性・必要性は平地の交流の中で低下することなく、経済的には疲弊の度を強めながらも山村文化は独自性を保っていた。木地師・炭焼き・猟師・木挽き・焼畑従事者・修験者といった職能集団が山を生業の場として、それぞれの文化を後世に伝えた。

明治新政府成立以後、それまで山村住民の活動地の一部となっていた奥山や尾根筋の多くは国有林に編入されてしまい、生産や交易に規制がかけられてきた。しかしその一方で近代化の余波が山村にも押しよせ、“山の文化”に対する都市サイドからの必要性が高まった。例えば、建設資材としての木材資源、燃料源としての薪炭、繊維原料としての生糸（養蚕）といった“林野産物”に対する需要があり、これらの生産業は山村の現金収入源として定着した。明治以後の鉄道建設には膨大な木材を必要とし（枕木用にブナなど）、更に積雪地では線路除雪用にブナ製のコシキが大量に使われた。この他、鉱山開発の進展に伴って山間部で集落が新たに発生したり膨張したりした。これらは一例であるが、明治以後の近代化の中で山村は原材料の生産・供給地の役割を果たし、同時に資本主義の枠の中に組み込まれていくことになる。

こうした状態にあった山村に対して、最初の打撃となったのは昭和初期の恐慌に伴う養蚕業の衰退であろう。白山麓においても養蚕業の不振のために山の生活がちゆかなくなり、人口流出の一因となった。例えば、鳥越村鷲走谷には白峰村からの十数戸の出作り者（大部分は永住）がいたが、養蚕不況のために昭和5、6年頃にはほとんどいなくなった。大なり小なりこうした事態が他の地域でもおこり、以後養蚕は収入源の主役の座から降りた。代わって出てきたのが製炭である。炭は調理や暖房のための燃料として使われ日常生活に欠かせない存在であり、奥山まで林道が伸びて搬出が容易になったこともあって、重要な商品となった。これは白山麓のみならず広く全国的に見られた現象である。

その後、製炭はずっと山村の基幹産業の座を守り続けた。終戦後には、食糧難のために多くの人々が山村で生活し、白山麓では焼畑・畑作による生産活動が行われた。この頃から昭和30年代前半まで、

山村では製炭を軸とした伝統的生活が見られ、まだまだ人口扶養力はあった。ところが昭和30年代中頃からいわゆる燃料革命が起こり、日常生活のエネルギー源が薪炭から灯油・ガスに変わるなど、製炭業には痛い出来事であった。また、折から高度経済成長期に当たっていて、山村は労働人口供給地となった。これが山村にとっては、養蚕不況に続く第二の打撃となり、伝統的生活に終止符を打つことになる。白山麓では昭和38年に記録的な豪雪に見舞われたこともあって人口が急減し、過疎問題が表面化してきた。例えば白峰村の代表的出作り地の大道谷では、昭和30年頃には36戸あったが昭和40年頃には11戸になった。こうして山村問題イコール過疎問題という構造が出来上がり、その対策が急務となった。過疎に対する打開策としては、公共事業の導入と観光産業の振興により人口の定着・増加が図られたが、ここ20年余りの長期低落傾向は不変である。

(2) 山の文化への再評価と山村振興

以上が山村を取り巻く歴史的背景の概要であるが、今後の山村を考えるにあたっては、こうした過去を振り返ることも必要であろう。一つには、その地理的環境や経済的後発性によりこれまで山村はネガティブなイメージで見られがちであったが、歴史的に見ると決してそうではないという認識を山村住民自身が持つ必要があるためである。日本の農業というとすぐ稲作が挙げられるが、決してそれだけではなく山村には焼畑という長い歴史を持つ優れた文化があった。白山麓では焼畑とセットになって出作りという居住形態が成立し、山の資源（主に植物）を多用した独特の生活文化が育まれてきた。それら生活文化を積極的に評価し、価値観を持つことが山村には必要であろう。

こうした中から、山の資源の有用性を再認識し、その活用を通して確固とした自律性のある村づくりをしようという気運が山村内部で高まっていくのではなかろうか。むろん、時流に合わせて公共事業や観光開発も必要かもしれないが、その一方で伝統的山村文化の有効利用という施策も今後の山村の活性化のためには不可欠であろう。例えば、出作りという居住文化がせっかく白山麓にあるのだから、今日の都市の過密化や余暇の増大傾向を考えると、過去の出作り地をセカンドハウスとして再生されるということも充分可能であろう。また、白山麓で数百年以上の伝統を誇った焼畑がこのまま消滅するのは何としても惜しい話で、再興の可能性はないものだろうか。全国的に見れば、一部地域でまだ存続しているが、焼畑を永続性のあるものにするためには経済的基盤のあるものにしなければならない。他県では味の良さが決めてとなって赤カブを焼畑栽培し、商業ベースに乗せているが、白山麓でもこうした形で商品価値のあるカブやダイコンを栽培することにより、焼畑の存続が可能なのではないか。この他、伝統的食生活の中に組み込まれてきた動植物資源や、住居・民具に使用された樹木資源なども再評価すべきではなかろうか。

ただ、こうした方向で山村の文化を掘り起こし活用するには、これまで蓄積された伝統技術なり知識をしっかりと保持し、次世代に伝えなければならない。ところが高度経済成長期以後の山村生活の急変に伴い、中高年層と若年層の間で伝統的生活文化の授受がストップしてしまい、このままでは山の文化が廃れていくばかりである。実際、白山麓においても大正かせいぜい昭和初期生まれの世代までしか、古来の生活文化を受けついでいないのが現状である。そして、これら世代の人達は次第に高齢化しているので、なおさら文化の受け渡しが急務となる。先に、現在の山村が厳しい状況にあると書いたのは、過疎や経済面のことばかりでなく、代々伝わってきた文化がこのまま消え去るかどうかの瀬戸際にあることも意味していたのである。このことは、行政当局も住民も山村に居る限り常に認識すべき問題である。

こうしたことを念頭に置きながら本書をまとめたしだいである。白山麓山村文化の理解と活性化の一助となれば幸いである。

参 考 文 献

- 朝日新聞金沢支局 (1986) 常次郎氏の春夏秋冬
文化庁 (1977) 天然記念物緊急調査植生図・主要動植物地図第17石川県
千葉徳爾 (1983) いわゆる『出作り耕作』への疑問、はくさん第11巻1号 p.10-12、石川県白山自然保護センター
—— (1986) 近世の山間村落、名著出版
藤田佳久 (1982) 日本の山村、地人書房
—— (1985) わが国の山村開発の基本的方向、論集「開発と保全」第19号、地域振興研究所
石川県 (1977) 石川県の自然環境第2分冊—植生
石川県立郷土資料館 (1973) 白山麓民俗資料緊急調査報告書
岩田憲二 (1985) 出作り地の食生活—白山麓の場合、P.59-66
—— (1986) 白山の自然誌7—白山の出作り、石川県白山自然保護センター
加藤助参 (1935) 白山山麓における出作の研究、京大経済論集、p.245-351
幸田清喜 (1952) 白山麓白峰村、地域第1巻1号 p.42-50
—— (1956) 白山の出作り、現代地理学講座第2巻 p.270-289
松山利夫 (1982) 木の実、法政大学出版局
民俗学研究所 (1977) 改定総合日本民俗語彙第4巻 p.1562 平凡社
日本国語大辞典刊行会 (1976) 日本国語大辞典第19巻 p.84 小学館
農商務省山林局編 (1916) 日本樹木方言集
佐々木高明 (1972) 日本の焼畑、古今書院
佐々木高明・松山利夫 (1979) 第一次産業、尾口村史第2巻、P.201-206、尾口村
白峰村史編集委員会 (1959) 白峰村史下巻、白峰村
—— (1961) 白峰村史上巻、白峰村
橘 礼吉 (1980) 白山麓の焼畑による商品作物栽培、金沢市立工業高校紀要第7号 P.1-26
—— (1984) いわゆる『焼畑・出作り』への視点、はくさん第12巻2号 p.8-11、石川県白山自然保護センター
高沢裕一 (1981) 白山麓の近世農業、尾口村史第3巻、P.201-216、尾口村
田中啓爾・幸田清喜 (1927) 白山山麓に於ける出作地滞 (一) 地理学評論第3巻4号 p.281-298
—— (1927) 同上 (二)、地理学評論第3巻5号 p.382-396
若林喜三郎 (1962) 出作りの発達、白峰村史上巻、p.717-730 白峰村

執筆者・調査協力者一覧

*執筆者

(I-1-(1)、(2))	岩田憲二	石川県白山自然保護センター
(I-1-(3))	橘 礼吉	石川県立歴史博物館
(I-2-(1)、(2))	岩田憲二	石川県白山自然保護センター
(I-2-(3))	千葉徳爾	明治大学文学部地理学教室
”	叶内敦子	明治大学文学部地理学教室
(II-1、II-2)	岩田憲二	石川県白山自然保護センター
”	山口一男	白峰村桑島物産館
”	沢 与吉	尾口村文化財専門委員
(III)	岩田憲二	石川県白山自然保護センター

*調査協力者 本調査を行うに際し、下記の皆様には多大な資料・情報を提供していただきました。この場をかりて厚く御礼申し上げます。故人の方々には心より御冥福をお祈り申し上げます。

山口甚之助 (M.29 年生)	山口甚太郎 (T.11 年生)	中山喜四松 (M.44 年生)
中山与四喜 (S.5 年生)	織田 タマ (T.9 年生)	尾田 好雄 (S.8 年生)
尾田 清正 (S.6 年生)	尾田 フク (M.39 年生)	尾田 敏春 (S.16年生)
木戸口庄右門 (S.4年生)	加藤 改石 (T.10 年生)	織田長次郎 (T.15 年生)
山口 幸元 (T.9 年生)	竹腰 清勇 (M.45 年生)	山口 清次 (M.37 年生)
北山 勝義 (T.10 年生)	織田喜市郎 (M.42 年生)	杉田 敏雄 (T.13 年生)
愛知 正男 (S.5 年生)	山口清太郎 (M.36 年生)	兵井 庭一 (故人：M.43年生)
愛宕 富士 (M.39 年生)	長坂吉之助 (M.28 年生)	久司久四郎 (故人：M.39年生)
加藤 正信 (M.44 年生)	加藤岬 (故人：M.34年生)	加藤 勇京 (故人：M.29年生)
加藤 文吉 (M.38 年生)	木下 友治 (T.5 年生)	鶴尾伝兵衛 (故人：M.32年生)
北田亀太郎 (M.40 年生)	山崎 繁雄 (M.43 年生)	上田 太市 (M.44 年生)
山崎 ふさ (T.2 年生)	内河 きん (M.34 年生)	西 作太郎 (M.27 年生)
北村 りん (M.37 年生)	山内 行雄 (S.5 年生)	小田 孝太 (M.44 年生)
安本 辰男 (S.4 年生)	中川 助二 (M.44 年生)	外 一次 (故人：M.40年生)
仲間 菊能 (M.44 年生)	伊藤常次郎 (T.11 年生)	道見 鎌助 (故人：M.38年生)
橋爪 忠一 (M.32 年生)		(順不同、敬称略)

*写真資料提供者

伊藤常次郎 (P. 39 右、P. 54 左、P. 60~61)
橘 礼吉 (P. 2 左)